

| | |
|------------------|---|
| Title | アダム・スミス書誌拾遺 |
| Sub Title | |
| Author | 三邊, 清一郎 |
| Publisher | 慶應義塾経済学部研究室 |
| Publication year | 1944 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.38, No.5・ 6 (1944. 6) ,p.374(80)- 414(120) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19440601-0080 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440601-0080 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アダム・スミス書誌拾遺

三邊清一郎

アダム・スミスは、『國富論』の出版からその長逝に至るまで、生前の二著『道徳情操論』とこれに修正を加へるほか、全く著述の筆を執らなかつた。がしかしこゝに二つ發表の目的で書いた書簡、若しくは書簡の形式で執筆した一稿がある。すなはちデヴィッド・ヒュームの自傳 The life of David Hume, Esq. Written by himself. London. 1777. の附録、『法學博士アダム・スミスよりウィリアム・ストラアン氏に寄する書』Letter from Adam Smith, LL. D. to William Strahan, Esq. といふものである。

スミスが『國富論』を公にした頃から、その「忘れられぬ友」——ヒュームの健康が急速に衰へ、恢復いと覺束なきを愁へられた(一七七六年四月八日附アダム・スミス宛ウヰリアム・ロバートソン書簡。Lady)。彼れもその死を豫期して、アトロポスの鉢に生命の糸の断たれやうとする直前、自叙傳を書いた。それは一七七六年五月初旬、スミスに宛てて、「貴君は私の原稿のなかに『自叙傳』“my own life” と題する、至つて線かな一篇を見つけられるでせう。それは、私がとても命がもたないと考へ、友人もまたみなそう思つた、エデンンにを立つ數日前筆を執つ

たものである。」と書してゐるものである(「自傳」は「一七七六年四月十八日の口述である。(p. 35.) I. Rae Greig, vol. ii)。スミスはこれに對し、彼れの望みに反し、ヒュームの今度の病氣がその最後となるやうならざれば、自傳彼れの名で、「今の病中の様子を説く數行」を附け加へることを申込んだ。(I. Rae: Life of Adam) p. 300. 同一年の八月二十三日深くその好意を謝す手紙を書き(Ed. by G. I. Y. Greig, vol. ii, p. 336.) の五日(九月二日)世を去つた。自傳の原稿は九月清書されてヒュームの妹カザリン Katherine からスミスに届けられた(一七七六年九月二日附スミス宛「ホーム書簡参照」I. Rae: Life of Adam Smith, p. 303. またカザリンに)。(The letters of David Hume, Ed. by I. Y. T. Greig, vol. i, p. 159, note 2 参照)。スミスはこれより故友の病中の行狀の「極めて信據すべき説明」を書き、親友ジョージ (Ibid. p. 306-97.) へまた兄カーラム註の訂正を求めた。(Ibid. p. 304.) それはストラアンに宛てた書簡の形式を取り(一七七六年十一月九日の日附で書かれてゐる)二枚から成る(過ぎないものであつたことをスミス宛ら言つてゐる(一七七六年十月末「ストラアン」宛)スミス書簡。Ibid. p. 307.)。ストラアン宛書簡の形式を取つたのは、ヒュームがその著作の公刊を彼れに托したのだから、彼れに宛てるのが至當だと考へたからである(Ibid. p. 304.)。この原稿は十一月十六日ストラアンに送られた(Ibid. p. 308.)。

註「ジョン・ローム又はホーマ John Hume 又は Home. ナインツェルスの地主として世を終つたロームの先である『カラス』の著者ジョン・ホームひなす。—J. H. Burton: Life and correspondence of David Hume, vol. i, p. 337, vol. ii, 398.

元來ヒュームの自傳は、著者がその死を豫期して歿後出版されるべき『自然宗教に關する對話』Dialogues concerning natural religion. その他を収むる一卷の巻頭を飾るために執筆したものである(I. Y. T. Greig, vol. II, p. 453.)。しかしスミスはそれと一緒に自分の文章が印刷されるには異存があつた(I. Rae: Life of Adam) p. 306. など異存があつた。

たか。こゝで少しヒュームの『自然宗教に關する對話』の性格を説明して置く必要がある。『自然宗教に關する對話』は、著者がそれによつて「世界の美はしき秩序と機構から、一個の全智全能の神を歸納する自然宗教の組織者」と見られる書である (John Hill Burton. *Life and co. correspondence of David Hume*. Edinburgh, 1846. vol. i. p. 329.)。彼は本書でその「主人公」とした (三月十日附、エリオット宛、コーン書簡。) クリーニンズ Oleanthes をして「人間の想像力に示唆可能の最も調和的な思想は、純粹自然宗教のそれである。それは、吾々を幸福のために創造した、完全に善なる、智なる、有力なる存在の所業として、吾々に現はれる。『彼れは善への廣大な憧れを吾々に植え付け、吾々の存在を未來の永劫に延長するたう、またこの廣大な憧れを満足し、吾々の幸福を完全恒久なものたらしめるために、限りなく多様な境遇に置くたう、』と言はせてゐる (Ibid., p. 329.)。彼れは本書を一七五一年よりも夙く書き上げてゐたのであるが (Ibid., p. 328.)、しかしその内容が世間に醸すかも知れない物議を恐れて、エリオットその他の友人の忠告に従ひ註一發表を差控へてゐたのである (Ibid., p. 491; I. Rae: *Life*)。けれども決つてその出版を断念したのでない。彼れは一七七六年一月の遺言でスミスにその上梓を希望し (I. H. Burton: *Life and correspondence of David Hume*. vol. ii. p. 490.)、八月に加へた變更でストラファンに死後二年以内に於ける刊行を托した (David Hume, the letters of p. 453.)。スミスは恐らく「本書の性質」とかれの「地位」の故に (一七七六年三月三日附、スミス宛、エリオット書簡、Ibid., vol. ii. p. 317.)、また「多くの理由により」本書の刊行に關係することを避けたのだと推測される (一七七六年九月五日附、ストラファン宛、スミス書簡、Ibid., p. 306, G. Birkebeck.)。註二「またストラファンはコーンの自叙傳とスミスの書簡とでは、袖珍本と同じ一冊の體裁を成さなから、自分に宛てられた書簡のうち、政治に關するものを選んで附け加へたい希望を述べたが (David Hume to William Strahan. p. 350.)、スミスはこの意見にも反對であつた。『對話』の原稿と自傳のそれを除く凡そ全ての原稿の焼却は、故人の易らざる遺志であつた。」と註三のついで (Ibid., p. 310, G. B. Hill: *Letters of David Hume & William Strahan*. p. 351. cf. p. 352.)、かへつてコーンの自叙傳 *The life of David Hume, Esq. Written, by himself*. London, 1777. 25. 一七七七年結局「法學博士アダム・スミスよりウィリアム・ストラファン氏に寄せる書」*Letter from Adam Smith, LL. D. to William Strahan, Esq. containing a few pages of his papers* の袖珍型「小冊子」としてウィリアム・ストラファンから出版された (cf. G. Birkebeck Hill: *Letters of David Hume to William Strahan*, p. 354.)。註三

註一 本書の刊行に對するスミスの意見は、エリオットの死後、一七七六年九月五日ウィリアム・ストラファンに宛てた手紙に最もよく現はれてゐる。彼れはそこに『自然宗教に關する對話』はよく書けてゐるが、しかし原稿の儘で残つて、極く少數の人にだけ知られることゝなつた』と書いてゐる。——G. Birkebeck Hill: *Letters of David Hume to William Strahan*. Oxford, 1888. p. 347-48; I. Rae: *Life of Adam Smith*. p. 305.

註二 本書は結局ストラファンに於いて出版せられた一七七七年に於いて出版されたコーンの手紙の Dialogues concerning natural religion. By David Hume, Esq. Printed in 1779. 25. 同様に梓された。出版者の名は替はつた。——David Hume, the letters of Ed. by I. Y. T. Greig. vol. ii. p. 454.

註三 コンのスミスの書簡は、コーンの自傳を補足するものとして、それと共に屢々コーンの著作の後版に収録されてゐる。例へば

The history of England from the invasion of Julius caesar to the Revolution in 1688. By David Hume, Esq. With a continuation, from that period to the death of George the Second, by Tobias Smollett, M. D. and chronological records to the coronation of his present Majesty, George the fourth, by John Burke Esq. With numerous engravings in six volumes. vol. i. London, Thomas Bohn, 1825.

— 1855.

— A new edition. With the authors' las-

corrections and improvement. To which is prefixed a short account of his life, written by himself. Phil. 1876.

Essays moral, political and literary. By David Hume. Edited, with preliminary dissertations and notes, by T. H.

Green and T. H. Grose. 1875.

Letters of David Hume to William Strahan. By G. B. Hill. 1888.

The letters of David Hume. Ed. by I. Y. F. Greig. Oxford. 1932. vol. ii. p. 450-52.

スミスの書簡は、ヒュームの自叙傳の終るところ、すなはち一七七六年四月、旅行が健康に好果をもつこともあらうかと友人の奨めに従つて倫敦に向つたヒュームと、エディンブロに彼れを期待して倫敦を立つたスミスとホームがモルベスで邂逅したところから始まつてゐる。スミスは母に會ふためそのまゝカウウデイへの旅を続け、ホームとヒュームは相携へて倫敦に歸つた。ヒュームはその後バースに遊び一時多少健康を取り戻したやうであつたが、再び悪化し、エディンブロに到着した頃には、「夜の臥戸には且よりも衰へを覺え、朝床には夕よりも衰弱を感じた。」(Letter from Adam Smith, LL. D. to William Strahan, Esq. In "The life")。しかし彼れは努めて快活に振舞ひ、自著の校正や讀書に目を銷し、友人と話したり、ホイストを遊んだりした。スミスはある日彼れがルシアンとの「死者の對話」Lucians Dialogues of the Dead. を讀んで、「三途の川の渡守君。私はいま新しい版を出すために自分の著作に筆を入れてゐる。一寸待つて呉れ。世間がこの訂正をどう受取つて呉れるか見届けたい。……私は世間の人の目を開かうとしてゐるのだ。もう五六年壽命があつたら、いま横行してゐる迷信の一部が破棄されるのを見て、

満足して死ねるだらう、と言はうと思つた」などと冗談まじりに語つたと傳へてゐる(Ibid. p.)。ヒュームは、前に述べたやうに一七七六年八月二十三日スミスに最後の手紙を書いて、二日の後この世を去つた。スミスは、かうして吾々の最も勝れた忘れられない友は逝いた。その哲學上の所見はひと各々その見解に従つてこれを是認もし非認するだらう。けれども人格と行狀に就いては意見の岐れる餘地がない。寔に彼れの性格は、もしもさういつた表現が許されるならば、恐らく私が會つて知る誰れよりも均齊を得てゐた。生活の最も苦しかつた頃でさへ、その止を得ない大節約も至當な慈善と義行を妨げなかつた。それは貪慾でなくて、獨立心に基く節儉であつたのである。「要するに、私は、彼れを生前にも死後にも、人間の弱い性格が恐らく許しうるだけ完全な賢者、有徳人の觀念に近づけるものと考へる」と結んだ(Ibid. p.)。

しかし篤信者には、宗教のないものが有徳な生涯を送り、安らかな死を遂げ得る筈がない。彼れ等には、ヒュームは「計畫的な異端者」である。「キリスト教の覆滅を強行する一種の哲學を編み出すのが、彼れの生涯の目的であつた。このために彼れは生きた。彼れの望みは、嚴しい、悔悟のない、さうだ、楽しい、幸福な死をさへ遂げる、いな遂げると思はれて、世の中に自分の理論の力を誇示するであつた」と見られた(The new annual register, or politics and literature, for the year 1795. Biographical anecdotes and characters. Particulars of the life and opinions of Dr. Hodne, late Lord Bishop of Norwich. [Extracted from Memoirs of his life, studies, and writings, by William Jones, M. A. F. R.]。従つてこのキリスト教第一の敵を、正しい生活以上を送り、不安なき、いな却つて愉快な死を迎へたと稱へるスミスは、神への冒瀆を取つてするものであつた。ボスウエルは、ジョンソンに「貴君がヒュームとスミスの頭をぶつつけさせて、無益な、これ見よがしの無信仰を、極めて滑稽なものにするに賛成だ」と書を送つたと傳へる(James Boswell: The life of Samuel Johnson, LL. D. Together with the Journal of a tour to the Hebrides. Ed. by Alexander Napier. London, 1892. vol. iii. p. 153, David Hume; Essays moral, political, and literary,

ed. by T. H. Green and T. H. Grose. History). スミスの書が公にされたと同じ年にチ・オシ・ホーム・George Home of the editions, by T. H. Grose. p. 83. が「キリスト教徒と稱する者の一人」one of the people called christians の名で公開状『法學博士アダム・スミスに、その友デヴザッド・ヒューム氏の生涯と死と、及び哲學に關して寄す書』A letter to Adam Smith LL. D. on the life, death, and philosophy of his friend David Hume Esq. Oxford, 1777. を書いた。ホームはオックスフォード、マクダレン・カレッジの學長、『詩篇註解』Commentary on the Psalm, 1771 の著者あり、後、ノーウチの僧正となつたひとである。(T. Rae: The life of Adam Smith. p. 313; cf. Dictionary of national biography. vol. IX. p. 1250., The new annual register for 1795, Biographical anecdotes and characters. p. 2446.)。彼れに據れば、ヒュームの哲學の構想は「眞理と慰安、救ひと不滅、未來の國、及び攝理の各觀念、いな神そのものゝ存在をさへこの世から拂拭する」ものであつた。(George Horne's Letter.)

公開状は次ぎの言葉で始まつてゐる。「拜啓 貴君は頃日一人の哲學者を後世に傳へるの勞を執られた。否私は彼の形骸を、と言はねばなるまいと信ずるのである。なぜなら、彼れの他の方面に就いて言へば、貴君も本人も、寢ても醒めても、ある一つの考へを懷かれたとは思はれないからである。でなければ、それが確かに貴君の注意を少しは惹いたこととせう。ひとは靈魂の存在と不滅の信仰が『道徳情操論』に有利でないまでも、害をなす筈はないと信ずるでせう。しかし人々をみなお互ひに自分の仕事を一番よく知つてゐる。』(p. 1.)。この書には議論がない。スミスの言葉尻を捉へた惡洒落や大雜束なひき較べの連續である。ヒュームがホイストを好いたといふので、ペンキ屋ジョン註一も同じ遊戯を弄んだと思ふが、國內の有ゆる造船所を焼き拂ふといふやうな突拍子もない空想を是認する譯にいかないとか(p. 5.)、世の中に本當に神といつたものが存在しないならば、死の床でルシアンを讀み、ホイストを弄び、冥途の渡守と渡舟問答を娛しむのもよからう。しかし「若しもさういつたものがあるならば

——その存在することが最も確かであるやうに——、宗教と名づける有ゆるものに度し難い反感を持ち、強行し得たらその名をさへ記憶から拂拭するために、その精神(宗教の)を民衆の間から放逐し、抑壓し、根絶するに全精神を傾けた者の人格と行狀を、『完全に賢且つ有徳な』ものと吾々に訓へる貴君は果して正しいか、といった具合のものである(p. 9.)。かくて彼れは「貴君はデヴザッド・ヒュームの例によつて吾々に、無神論が下卑た人間の唯一の強心劑、死の恐怖への恰好の解毒劑だと説き付けられる。けれどもかやうに自分の才能をその生涯に於いて誤用し、その死の床に於いてルシアシヤやホイスト、カロンを娛しむ友人を、満足して回想できるひとは、恐らく確かにバビロンの滅亡に微笑を投げかけ、リスポンを廢墟に歸した地震を快事と考へ、心剛復なバロの前にその紅海の敗亡を壽ぐだらう註二」と結論した(p. 29.)。

註一 ペンキ屋シモン John the painter (1752-1777.) は、本名は Aitken James. ホンキプロの生れであつたが、アメリカにも放浪してその獨立に同情し、イギリスの造船所や船を焼き拂つたら彼等に有利だらうといふので、ホーツマタスの造船所やアリストルの波止場に放火して、その頃(一七七六年十二月—一七七七年一月)世上を騒かせた別盜である。——

Dictionary of national biography. vol. I. p. 205; The annual register for the year 1777. p. 28.

註二 舊約全書出埃及記第十四、十五章。

ホームの傳記者は、本書は「その所論明快、その諧謔は自然、安らかであり、正直なひとはその顔を綻ばざるを得ず、不信心ならざるものは憤りを感じざるを得ないものである」と評してゐる(The new annual register for 1795.)。けれども私には著者がその序文で、變名でこの冊子を出すのでなかつたら屹度ヒュームと同じやうに元氣な、氣嫌のいゝ自分の肖像を扉に載せただらうと思ふが(ヒュームの自傳にはその莞爾やかな半身像が載つてゐる)、出版書

肆はそうすると六志賣價が高くなると言つた、などと無駄口を利いてゐることなどから、本書は眞面目に書かれたものであると思はれない。註ジョン・ヘンリー・オバアン John Henry Overton は、ホーンは若い頃からニールト、ヒューム、アダム・スミス、ウツリアム・ロオのやうな反對論者に澤山バンフレットを書いたけれども、誰れもみな彼れを輕視したと言つてゐる (Dictionary of national biography, vol. ix, p. 1250)。スミスもまたその例に漏れなかつた。彼れは全くこれに黙殺した。要するに、この事件はスミスの學問的生涯に何等重要性をもつものがなく、新思想が生れ出づる黎明期に於いて屢々見られる、舊思想の單な反動の一例と見ていい。

註 本書は普及を圖るために一志の廉まで賣り出されたから、數回版を重ねたやうである。彼れはまた一七八四年 W. S. (William Stevens) に宛てた『無神論に就つての書簡』 Letters on Infidelity. By the author of a letter to Doctor Adam Smith... Oxford, 1784. を公にした。そのうちの數篇もスミス宛書簡と同じ題目を取扱つたものである。 — Dictionary of National biography vol. ix, p. 1250—51.

二

『ウツリアム・ストラファンに寄する書』は、形式は書簡であるとは言へ、實質は一の著作である。彼れが未完成の原稿の破棄を志したことは、本書誌の初めに述べた (本誌第三十四卷第九號、小稿)。また書簡に就いては、その出版は「日の眼を見るに適當でない多くの事柄を公にするたらう。その書簡が差別なく發表されたほど、スウツフトの著作の價值低落に興つたものはない。」と言ふのが彼れの意見であつた (一七七六年十二月二日附、ストラファン宛スミス G. Birkbeck Hill: Letters of David Hume to William)。しかしこの意思に反して彼れの書簡はその死後屢々の機會に發表され、印刷に附された。それは彼れの素志に悖るものであるかも知れないけれども、後の研究家には仕合せ

であると言はなければならない。最も夙いものは、ダッカアド・ステュアートが一七九三年「王立エデンプロ協會」で發表した、スミスがグラスゴウ大學の學長に選ばれた際、同大學總長に宛てた紀念すべき書簡であらう。「如何なる一人も一の團體に對して私のグラスゴウ大學に於けるほどの恩義を受けてゐるものはない。彼等は私を教育し、私を牛津に送り、私の蘇蘭歸國後間もなくその一員として私を選擧し、而してその後の永久に忘るべからざるハッチスン博士の能力と徳とが最高の名聲を與へた別任務に私を昇進せしめた。私がかの團體の一員として過ぎした十三年の時期は、私の生涯の遙かに最も有用にして従つて最も幸福なる、最も榮譽ある時代として私の記憶する所である。而して今や二十三年の不在の後、わが昔日の友人と保護者等によつて、斯くも快よき方法に於いて懐い出されることは、實に容易に言ひ現し難き衷心よりの喜びを私に與へる。」 (小泉信三博士「アダム・スミス」引用。Dugald Stewart: Account of the life and writings of Adam Smith L.L.D.)。彼れはまた本講演をこの協會の『會報』に載せた際、「一七七三年四月十六日心身の衰へを感じてその原稿の死後の處置をヒュームに托したスミスの書簡を發表した (p. 80; Essays, p. 1xxix; 本誌第三十四卷第九號)。」

次に發表されたものは、私の知る限りでは、一七七七年一月十九日『ボオナル總督より法學博士、王立協會會員アダム・スミスへの書簡』の著者に宛てたそれである。これに就いては私は既に述べた (本誌第三十六卷第九號小稿「國富論書誌」三六一—三七頁)。

彼れの書簡は、そのほか、同時代の人々の著書その他にも收められてゐる。スミスと交遊久しかつたジョン・シンクニア Sir John Sinclair は、この「偉人」が彼に與へた最も價值ある手紙の幾通がを失つたことを悔みながら、その『書簡集』 The correspondence of the right honourable Sir John Sinclair, Bart. with reminiscences of the

most distinguished characters who have appeared in Great Britain, and in foreign countries, during the last fifty years. Illustrated by facsimiles of two hundred autographs. London, 1831. 2^e ジョージ・マクドナルド・モアヌ Moreau de Beaumont 『の歐羅巴に於ける租税と法との關係の覺書』 Mémoires concernant les impositions et droit en Europe. 1768-69. 註一の貸與を約束した一七七八年十一月二十四日附の書簡、及びシンクレンアから贈られた一七八二年の同人の自著、「一小冊子」註二に對する所見を書き送った同年十月十四日附の手紙を載せた。前者では、同書が英國ではたゞ四人しか所有者がなく、彼の一冊はテールムーから譲られ、「屢々の機會に、私的研究に、註三また職務上、自ら本書を参考として用ひた」旨述べてゐる (Vol. i 387-90; cf. J. Rae: Adam). 註四また「J. タムソン John Thompson の『ウィリアム・キャンベル』 Life, lectures and writing of William Cullen, Edin. 1832. 2^e 位の價值に關して『國富論』の公刊二年前に書かれ、私信の故に著書に於けるよりも忌憚なり意見が表明されてゐる」とイカリックの注意を惹いた。一七七四年九月二十日の手紙註五その他が收められてゐる (Wealth of nations. ed. p. ed. 1839. p. 582-85. cf.)。註六 Editos' preface, note.

註一 本書はスミスの手紙にも、シンクレンの『書簡集』にも Mémoire sur les Finances. と書かれてゐる。ソレは「スミスの場合、手許に本がなく、記憶から筆を執つた」の間違いだのトイふ。 (J. Rae: Adam Smith. p. 343, note 2.)。それについての間接にあられた書物は D' Eon de Beaumont の Mémoires pour servir à l'histoire générale des finances. Londres, 1758. であるかも知れない。 (J. Bonar: Catalogue. 2. ed. 1932. p. 20.)

註二 本冊子は、ソレは探し得ないものになつてゐる (J. Rae: Adam Smith. p. 382.)。たゞジョージ・マクドナルドの『アダム・スミス文庫目録』には、著者より贈られた、同年のシンクレンの『英帝國の海軍力に關する考察』 [Thoughts on the naval strength

of the British Empire by John Sinclair, Esq. London, MDCCCLXXXII. など五十八頁の小篇が收められてゐる (p. 158.)。本冊子と推察してゐるのであるかも知れない。

註三 アダム・スミスは『國富論』に屢々本書を利用してゐる。 Cf. Bona: A catalogue of the library of Adam Smith. 2. ed. 1932. p. 20-21.

註四 小ジョン・シンクレンの『J. シンクレン傳』 The Life and time of Sir J. Sinclair. 1837 vol. i. 39. 二一「一七九九年十一月八日附の手紙が載つてゐる (J. Rae: Adam Smith. p. 344-45.)」

註五 「……「さし學位が、われわれの「一片の虚假威」に過ぎないものであつたし、またどんな規則を作つても、さういふことをうてなければならぬとすれば、それをそのやうに解するのが、確かに世の爲めである。……「定身分の學生にだけ與へられる學位は、一の徒弟法である。それは丁度他の徒弟法が諸技術や製造業の進歩に貢献しなかつたやうに、恐らく科學の進歩に資するところがあるまうと思はれる。」 (J. R. Mculloch. ed. Wealth of nations. n. ed. 1839. p. 584.)」の章句を『國富論』第五篇第一章第三節第二款「少年教育施設の經費について」の同様の文章と對照された。

註六 そのほか「J. マクドナルドは次の諸書からスミス書簡を探し出し、その『スミス傳』に利用してゐる。

Correspondence of James Oswald.

Nicoles Literary illustrations. vol. iii.

Frasers Scots of Buccleuch. vol. ii.

Broughams Men of letters. vol. ii.

The Academy. 28 th February 1885

New York evening post. 30. March, 30. April 1887.

アダム・スミス書誌拾遺

Journals and correspondence of Lord Auckland. vol. i.

Gibbon's Miscellaneous work, vol. ii.

またG. B. ヘルの『ウィリアム・ストララン宛テヴキッド・ローム書翰集』G. Birkbeck Hill: Letters of David Hume to William Strahan Now first edited with notes, index, etc. Oxford, 1888 には、ロームの自傳に附した、既述「ウィリアム・ストララン宛書簡のほかに、ロームの『對話』の出版に關する一七七六年九月五日、同年十二月二日及び同年同月(草稿) 附同人宛の書簡が收められ、ジェームズ・ボナーの『アダム・スミス文庫目錄』(一八九四年)には、「妻が不義をはたして居らぬのにその貞操を疑ふ夫よりも、妻が不義を働いてゐるにも拘らずこれを潔白だと信ずる夫の方が仕合せである」といふ諺を引いて、自著の恣な出版者の改竄を戒めてゐる有名な手紙の複寫が載つてゐる(『三田學會雜誌第三十四卷第九號、小稿』)。

註 又ジェームズ・ボナーはマカラックの『アダム・スミス傳』の一八五五年版にスミス書簡の複寫が收められ(A catalogue of Library of Adam Smith. 2. ed. 1832. p. 183.) スコットは、友人間に配布するため五十部しか印刷しなかつたと云ふ同じスミス傳『Sketch of the life and writings of Adam Smith. 一七七六年六月十六日附のローム宛書簡が載つてゐると報告してゐるが、兩者とも私は未だ一覽の機会を得てゐない。(W. R. Scott: Adam-Smith as student and professor. p. 271, note 3.)

以上稍々夙い時代に發表されたものを紹介したが、彼れの書簡はその後も發見されて、續々報告されてゐる。次ぎにその主なものに就いて述べやう。

スミスが一七八九年三月三十一日カデルに、道徳情操論第六版準備のためにいたく勞したので、健康を害さへ

し、主として休養のために税關の常務に歸ることを知らせたことも前に述べた(本誌第三十四卷第九號、小稿)。

一九二三年六月グラスゴウ大學で行はれたアダム・スミス生誕二百年紀念展覽會に陳列された一七八八年五月十五日附同じくT. カデル宛書簡も、また本書改訂に關する前後の様態を傳へてゐる。「貴君が私の永い沈黙を訝かされるのは、大きに尤もです。私は蘇蘭に歸つて以來健康が勝れず、税關の勤めも甚だ忙しく、これ等の事情の許す限り、勉強に努めたけれども、努めたと言つても大したことはなく、また着實でもなかつた。従つて進歩もたいして大でなかつた。今日同僚と離れて四ヶ月になる。私は只今大馬力をかけてゐます。對象は『道徳情操論』です。私はその有ゆる部分に多數の増補と訂正を試みてゐます。義務感に關する第三篇と道徳哲學史の最終篇に最も重要な、主な増補が加へられるでせう。私のこの生命の保持がいたく危ぶまれ、それを既に企て多少進歩を見せた他の數篇の著述を完成するやう生き抜けるかどうか甚だ疑はれるので、私のできる最善は、既に公にしたものを、最もいゝ、最も完全な状態で後に残すことだ、と私は考へるのです。私は何事を爲るにも、また元へ返すにも、のろい、至つてのろいな働き手です。私は相當納得できるまでに、少くも六回は書き直します。私の著述も今や峠を越したとは信ずるけれども、しかしそれを貴君に御送りできないうちに六月になりませう。私は増訂は全部貴君にお贈りしたい、と思つてゐることは前にも申し上げたから、重ねて申し添へる要はない。従つてこの本の新版をその前に出さないやうお願ひしなければならぬ。(Economic Journal, vol. 10, p. 427.) キヤナンが『エコノミック・ジャーナル』第八卷に發表した一七八四年十一月十八日附の手紙も本書誌に重要であるけれども、それは既に別の機會に觸れたから略する(本誌第三十六卷第九號小稿、國富)。

註 又は同卷には Economic Journal, vol. VI, 1896 一七六六年三月二十五日附カデル宛書簡が掲載され、また第六卷(一八

九六年には一八九五年十二月二十八日の Athenaeum に初めて発表されたといふ一七八五年十一月一日附のロシユフェウ卿 Due de la Rochefoucauld 宛のスミス書簡を紹介されている (p. 165-66)。

手蹟蒐集家ドロセア・チャーンウッド Dorothea Charnwood が報告する一七七九年一月のスミスの書簡は、「今後機会があるかも知れない」訂正、増補の箇所を印すために、國富論の初版及び再版の各二部を除いたほか、全部をひとに贈つた旨を知らせ、「私は『諸國民の富に關する研究の著者であることを殆んど忘れて居つた』といふ一七八〇年十月二十六日附ストラアン宛尺牘とともに、國富論再版公刊直後に於ける寛いだ著者の心境を傳へてゐる (Dorothea Charnwood: an autograph collection and The making of it. London, p. 1930. p. 120. 三田學會雜誌第三十六卷第九號、小稿「國富論書誌」四二頁參照。註)。

註 チャーンウッド夫人が同じ書物で紹介してゐる一七七六年四月八日附、スミス宛ウヰリアム・ロバートソン William Robertson の書簡は、國富論版公刊が友人に與へた感激を傳へてゐる。

「私に手紙を書く氣持がなく、貴君ほどそれを期待しないひととは承知してゐるが、友人の異常な、價値の高い努力を考へるとき、當然だれでも感ずる、かの心からの満足を少々表明せずしては、私に注入した新しい理念と知識に満ちた『研究』の最初の二讀を了へて腰を上げる譯にいかない。貴君が本書にどれだけ多く月日と注意を捧げられたか知つてたから、私は大ひに期待をかけてゐた。がしかしそれは私が豫期したものを遙かに超えてゐる、貴君は政治學の最も込み入つた、重要な部分を秩序ある一貫した體系に組織せられた。若しも英吉利人が革命原理の商人的主張者が導入し、ロックやその人氣文筆者が支持した狹隘偏狭な處置を超えてその思想を擴張する能力をもつならば、貴君の書物は政治及び財政二つながらの重要な數項に全體的な變化を生ずるだらう、と私は考へる。當地に居る貴君の友達ばかりはみな貴君の著作に關して同じ考へをもつてゐる。けれども恐らく、吾々が貴君にお會ひするときには、貴君の信條の、この又ほかの項目を議論し論議するかも知れない。けれどもそれは謙虚な心持からであつて、愛すればこそそのあげつらひです。しかし貴君の友達のなかで、私ほど貴君の勞作と

發見から利益を享けるものはありますまい。植民地に關する貴君の觀察の多くは私にとつて非常に重要で、貴君を先達兼先生として、従ふことが多いでせう。植民地貿易制限の不條理に就いて私自身が考へるところが、私が自分でなし得たよりも遙かによく立證されてゐるのは仕合せです。私はいま私の仕事をすつかり了へました。がしかし英吉利植民地と、英吉利植民地が投ぜられてゐる現下の不安状態に關する事柄を、躊躇し乍ら私は筆を進めてゐます。

「御著はきつと全歐羅巴の政治または商業法典となるに違ひないし、また實際家も思索家とともに屢々貴君に意見を求めらるに相違ありませんから、第二版には詳しい索引と、初づく各段落の題目の通行を示す本屋の所謂傍註をつけられたいものです。そうすれば本書から智慧を借りたり、參照したりするのに、大へん便利となりませう。私はいま貴君の本が貴君の手を離れて、蘇蘭で貴君にお目にかゝれることを希つてゐます。……」 (Lady Charnwood: An autograph collection and the making of it. London, 1930. p. 121.)

最後にヴァンダアブリュー・コレクション中に見出される一七九〇年五月二十五日附の T・カデル宛を割愛する譯にいかない。これは蒐集者が「現存するスミスからの手紙の最後のもの」と推測するものである。彼れはその中でカデルに自著數部を受取つたことを謝してゐる。「私の著書十二部が滞りなく着きました。厚く御禮を申します。製本屋が覺書をつけて、その一冊が E の一枚分がなく、不完全であることを知らせて來てゐます。どううかその不完全の分を蘇蘭へ送られる第一便の小包で御送り下さい。」と云つてゐるものが、ステュアートが「スミス傳」のなかで「劇しい病氣と闘つてその増補の大部分を執筆し、その逝去の前年の初冬印刷所に送つた」といふ『道徳情操論』の第六版であることは疑ひあるまい。吾々はこゝにスミスが本書の出版を見て逝いたといふステュアートの言葉に一の證據を加へるのである (The Vanderlute memorial collection of Smithiana. Boston, 1939. p. 48-49. cf. Essays. p. lxxxix.)

彼れはまた同じ手紙で健康の恢復涉々しからず、倫敦上京の希望の日々薄れゆくを歎いてゐる。註

註 一七三一年W・R・スコットが『エコノミック・ロスタリ・インター』Economic history review. Jan. 1931. に報告してゐる一七八九年三月二十五日ヘンリー・ダングス(Henry Dundas)一七八七年ロットがスミスに對して「吾々は皆貴君の弟子です」と云つたのは彼の家の宴席である。宛の書簡は、その頃、現存するスミス書簡の最後のものと考へられた(p. 88-90)。なほヴァンダアンリッシュの『アダム・スミスと國富論』Homer B. Vanderblue: Adam Smith and "Wealth of nations." Boston, Mass., 1936. には、スミスが王室工場監督の地位にあきを生じたことを知るや、時を移さずこれに、獨創力に富むエター・メーンを推薦する一七八四年六月十八日附ケアトシヨア博士宛の書簡が發表せられてゐる(p. 67)。けれども同じく同書に紹介せられてゐる、カデンが「直ぐにも新版に着手した處つてゐる」ことを追白とした、一七八五年十一月二十日附の手紙は、(p. 89)著者が言ふやうに、國富論第三版の出版に關するものとすれば、日時が一致しない。偽筆であつたのであらう。後のThe Vanderblue memorial collection of Smithiana. 1939. には收録されて居らぬ。

スミスの手蹟は(こゝでは尺牘のみに就いて言ふ)は、このほか、彼れの養嗣子デヴザッド・ダクラスの裔D・D・バンナマン博士その他の手に現に保存せられ、註一W・R・スコット教授はこれ等を探ねて、その名著『學生及び教授としてのアダム・スミス』の第二篇としてその未發表のもの約四十通を蒐載した。註二

註一 シモン・レヒが擧げるスミス手蹟の所在は次ぎの通りである。

Bueloch MSS.
Original in possession of Prof. Cunningham, Belfast
Lansdown MSS.
Hume MSS. K. S. E. Library.

Original with Mr. F. Barker.

Originals in possession of Mr. Alfred Morrison

Add MSS.

Originals in Edinburgh University Library.

Egerton MSS, British Museum.

註二 クラーク教授の著する『スミスの手蹟』を參照せよ。

Bannerman MSS. University Library, Glasg.

Pierpont Morgan Library, New York.

Papers from the Bowood Library, in the possessions of the Marquis of Lansdowne.

Boston Public Library.

In the possessions of J. H. Hollander.

Edinburgh University Library.

University of London (Goldsmith's Library).

The Pennsylvania Historical Society.

In the possessions of the late Prof. E. R. A. Seligman, New York.

In the possessions of the late Prof. Foxwell, Cambridge.

Papers of Sir W. F. Stuart Menzies, Barr., Mansfield House, Ayrshire.

National Library, Edinburgh (Watson coll. MSS; George Chalmers's coll; Melville Papers MSS.)

アダム・スミス書誌拾遺

九八 (三九二)

State Historical Museum, Moscow.

General Register House, Edinburgh.

Harvard College Library.

In the possession of Miss J. E. S. Black, S. Farnborough.

New York Public Library.

なほスミスの書簡は

Nouveau manuel epistolaire, 1911.

Loebhart: Notes on the life time and relics of Adam Smith. 1913.

Memorial Tablet to Adam Smith (unveiled at birthplace)

にも収録されてゐる(經濟論叢第十八卷第一號「アダム・スミス生誕二百年紀念號」三八七—八八頁)といふことであるが、私に見てゐない。

三

本誌第三十四卷第九號に「アダム・スミス書誌」を發表して以來、兩三回に亘つて、私は、彼れの執筆した、今日までに知られる殆んど全部を紹介した。いまやその業績を俯瞰する全集に及ばなければならぬ。

一八一二年T・カデル及びW・デヴィスその他が、倫敦で「アダム・スミス著作集」[The Works of Adam Smith... With an account of his life and writings by Dugald Stewart. を上梓した。五巻本である。第一卷「道徳情操論」、第二—四卷「國富論」、第五卷「言語起源論」「哲學問題諸論文」。そして第五巻には出版者等は、ステュア

ートの「スミス博士の生涯及び著述の説明」のほかは、彼れが第一次「エディンブロー評論」に寄せた「サミュエル・ジョンソン編英語辭書批評」A dictionary of the english language, by Samuel Johnson, A. U. Knappton, 2 vols. Folio, 41 15. s.、及びエディンブロー評論編輯者宛書簡「A letter to the authors of the Edinburgh Review. を收め(本誌第三十四卷第九號、小稿「アダム・スミス」)、「それ等が初めて載つた雑誌が絶版になつてから久しいから、附録の體裁(スミス書誌「一二六—二七頁参照)で、著者の初期研究の興味ある逸文を収録したことが、多數讀者の満足を買ふべき」ことを期待した。第一卷の巻頭には、J・ジャクソンが描き、C・ピケールが蝕刻するタッシー牌の複寫が飾られてゐる。註「またJ・C・ブ

リノーネ Jacques-Charles Brunet. O Manuel du Libraire et de l'amateur de livres. Paris, 1860-65」に據れば、一八一二年エディンブローで出版された「アダム・スミス全集」があるといふことである。註二

註一 本の版 The Vanderblue memorial collection of Smithiana. に報告されてゐるものは、第一—三巻が一八一二年刊で、第四—五巻が一八一一年である。然るに慶應義塾圖書館に蔵するものは、第一巻は標題紙を缺いてゐるので刊年は不明だが、第二巻が一二年、第三—五巻が一二年である。然るに一本文で述べたやうに、本版では第二—四巻に『國富論』が收められてゐるのである。出版者が一八一一年に第三卷乃至第四卷と『國富論』の途中から出版を初めて、一二年に至り第一卷乃至第二、第三卷へと刊行續けたとは考へられないやうに思ふ。本版には一八一一年と一二年版とがあり、ヴァンダーブルー文庫のものと慶應義塾圖書館の蔵書と共に足本であるのであまいか。

註二 The Vanderblue memorial collection of Smithiana. p. 45. note.

一八一三年には「アダム・スミス全集」新版 The whole works of Adam Smith. LL. D. F. R. S. dc. in five volumes. A new edition with a life of the author, London, 1822. が上梓された。この五巻本で、收むるといふ

アダム・スミス書誌拾遺

九九 (三九三)

は『著作集』と同一だが、『エディンブロー評論』に載せられた兩篇は状態が異なる。「この版のために書かれた」といふスミス傳が載せられてゐる。また一八二五年と同じく五卷本からなる『スミス著作集』The works of Adam Smith... With a life of the author. London, Printed for T. and I. Allman. etc. 1825. が出版をむづかしくしてあるが、筆者は見えてゐない。

四

經濟學の父の風貌を傳へるものとして、その傳記はこの書誌に缺くべからざるものであらう。一七九〇年七月十七日彼れがエディンブローのキヤンデーター近郊のハンミントン・ハウスに逝くや、『ゼントルマンズ・マガジン』The Gentleman's magazine: and historical chronicle. For year MDCCXC. vol. ix. p. 673. に死者略歴が刊、重ねて八月號に「故アダム・スミス博士追想錄」Biographical memoirs of the late Dr. Adam Smith. が載せられた。筆者は詳らかにしないが、チャーナリストらしい筆致で、スミスがヘリオル・カレッジの最初の食卓に着いたとき、學僕が「スコットランドではこんな肉片は滅多に見られなかつたのだから、はやく食べたらいからう」と言つたとか、タウンゼンドをグラスゴウの製革所に案内したとき、得意の分業に就いて説明しつゝ革桶のなかへ落ちたとか、彼れの放心振りを傳へる話(cf. J. Rae: Adam, p. 18, 147.)、彼が學生がノートをとるのを嫌つたといふ傳説(cf. Ibid., p. 64.)、またバンクフル公爵と大陸に旅立つ前の或る日、その教へ兒全部に出席するやうに求めて、その年「完全に約束を果さなかつたから、今年の講義は無償でなければならぬ、また残りの講義は上級生の誰れかに讀んで貰ふより外あるまい」と言ひ渡し、聽講料を返した話(cf. Ibid., p. 170.)、新興都市グラスゴウの富商達——そのなかにはジョン・グラッファード John Glasford(cf. Ibid., p. 90, 94.)、も雜つてゐた——と交つて、彼等の中から講義の改善に必要な事實を澤山に學び

取つた——、これによつて「彼は道德哲學の講座を商業、金融のそれと變へた」と筆者は言つてゐる(cf. Ibid., p. 261.)。等を傳へてゐる(p. 261.)。註

註 アダム・スミスの『マンロー・マンスリー』Monthly review. に彼の追想錄が出てゐるやうに言つてゐるが、しかし私の調べた限りでは誤らうである。(cf. J. Rae: Adam Smith, p. 64.)

權威あるもの、最も夙いものは、ダウカード・ステewartが「一七九三年一月二十一日及び三月十六日の二夜に互つて王立エディンブロー協會で朗讀した」法學博士アダム・スミスの生涯と著作に就いての説明「Account of the life and writings of Adam Smith, LL. D. by J. Rae」(cf. J. Rae: Adam Smith, p. v.)。これは、物故會員中の名士の傳記を追憶する間に事實を蒐集して、生存會員の記憶を留めやうとした同協會創始以來の習慣に從つたものであ

る。(Dugald Stewart: Biographical memoirs of Adam Smith, LL. D. of William Robertson, D. D. and of Thomas Reid, D. D. Read before Royal Society of Edinburgh. Edinburgh. 1811. Preface, p. v-vii; The collected works of Dugald Stewart, vol. x. Biographical memoirs, 朗讀者ダウカード・ステewart Dugald Stewart は一七七八年アダム・マンローの後を襲つてエディンブロー大學の道德哲學教授となつたひとである。彼れの行つた經濟學の講義は一般に佛蘭西經濟學者とアダム・スミスの思索の結果を併せ容れたものとせられる(H. Moncreiff Wellwood: Memoire of Dugald Stewart. In "Collected works," vol. x. p. xlix.)。

彼れ自身は「自分の主な目的は、主としてスミス氏の『研究』を熟讀玩味せられる諸君の研究を容易くし助成するために、かの經濟學なる項目と關係ある、一部最も重要な根本原理を説明するにあつた」と言つてゐる(Dugald Stewart: Lectures of political economy. In "Collected works" vol. S. p. 425.)。恐らく彼れは同協會の會員中スミスの傳記者として最適任者であつたのであらう。彼れにはまた彼れの父がグラスゴウ大學に於けるスミスの級友であつたといふ縁もあつた(J. Rae: Life of Adam Smith, p. 10.)。彼れは本傳記を編むに當つて、「蒐め得る限りの確實な消息を殆んど盡した」と信

する」と言ひつゝある(Biographical memoirs. 1811. p. vi)。スミスの夙の頃の弟子であり、なほ健在であつたジョン・シンプソン(一七三五一八〇一年)に教へを乞ふたことは言ふまでもあるまい。慶應義塾圖書館に藏するところの説明文 Accounts of the life and writings of Adam Smith. n. d. は「ジョン・シンプソンへの著者贈呈本 (To John Miller Esq. From the author of the book) である(後述参照)。

彼は本追憶の第四節でスミスの『國富論』の一般的な説明を與へてゐる。前述のやうに彼は固よりスミスの理論を全面的に受容れ、政治的自由意見を無遠慮に表明するものである。しかし彼の時代にもそれは革命的な「佛蘭西原理」を撒き散らすものだといふ、『國富論』に對してもたれたと同じ危惧の念が懷かれたのであつて註、これに對して彼れは、その言葉に従へば、「スミス氏の私の説明の五十七及び五十八頁(『會報』別刷の頁である。後述参照)に紹介した批評によつて、かういつた誤解の可能性を防がうと思つた」のであつた(一七九四年二月二十日附、書簡。Memoir of Dugald Stewart. In)。彼れはさうして「政治學の最も重要な部門は、法學の哲學的原理を確める(すなはち(スミス氏の言葉に従へば)「あらゆる國民の法律を貫き、その基礎たるべき一般原理」(A. Smith: Moral p. 550. 5th ed.)を突き留めるをその目的とする部門である。人民の先入見がこれ等原理と甚しく異なる國々では、憲法が與へる政治上の自由はこれに、その破滅を急ぐ手段を與へるだけである。しかし假りにこれ等の原理が何らかの法律制度のうち完全に實現されることと想定できるとすれば、人々はその制定に直接役立たないことを歎く理山はない」と言ひつゝある(Essays on Philosophical subjects. By)。

註 J. Rae: Life of Adam Smith. p. 292. 彼れの友人ウィリアム・キャンニング William Craig は一七九四年二月十五日の手紙で、彼れに彼れを纏つて次ぎのやうな批評の行はれたことを報じてゐる。――

「佛蘭西に目を展開せられる哲學と理論の勝利は、たとへ既存制度が、書齋で漠然考へるならば、思索的な賢者の理論よりも不完全に見えるとしても、あらゆる思慮ある、あらゆる有徳な人に、現制度の崩壞の危険を信じさせた筈である。當該の章を讀み、パリの大虐殺の後、……貴君「ステュアート」がそんな大それた過失を導いた學說にかつて寄せられたすべての感情、あらゆる言葉を潔く公然撤回せられる最も夙い機會を捉えられんことを私かに信ずる次第である。」

本『説明』は一七九四年『王立エドinburgh協會會報』The transactions of the Royal society of Edinburgh. 第三卷に公せられ、註一七九五年スミスの遺著『哲學論文集』Essays on philosophical subjects. By the late Adam Smith. LL. D. London. 1795. の巻頭に収録され、またその一部分は同年『ニューズ・ペーパー』The new annual register, or general repository of history politics, and literature, for the year 1794. London, 1795. Biographical anecdotes and characters. p. 3-12. 續つて七六年の十一月の『スコットランド・マガジン』Scots magazine に轉載された。著者自身も九四年に『會報』の別刷 Account of the life and writings of Adam Smith LL. D. From Transactions of the Royal society of Edinburgh. [n. d.] を作つて友人間に配布し、また一八一一年のウィリアム・ロビンソン・トーマス・リーの傳記の中に Biographical memoirs of Adam Smith. LL. D. of William Robertson. D. D. and of Thomas Reid, D. D. read before the Royal society of Edinburgh. Now collected into one volume, with some additional notes. By Dugald Stewart. Edinburgh, 1811. に收めた。また本傳記を屢々『國富論』後版の巻頭に全文或は要約して収録され、外國版に譯されたことは別の機會に述べた通りである。

(本誌第三十六卷、第九號参照)。

註 本『説明』の印刷の遅延に就いては、ステュアートは一七九四年二月二日にウィリアム・キャンニング宛てた手紙で「本説

明が十二月以上公にされたのは、全くカデマ氏(印刷者)のせいだ」と言ひつゝ (The collected works of Dugald Stewart, vol. x, p. lxxiii.)

スミスをその眼で知るひとの筆に成るものとしては、なほウィリアム・スメリー William Smellie (1740-1795) の「スミス傳」がある。スメリーは一七七一年の『大英百科辭典』初版に十五科以上の主要科目に就いて寄稿し、その印刷にも携したヘチ・キャンプロの印刷業者である。彼はスミス等が創設した「ヘチ・キャンプロ王立協會」が「ヘチ・キャンプロ哲學協會 Philosophical society of Edinburgh」とした頃からの會員であつた(Dictionary of national biography, vol. xviii, p. 401.)。しかしこれは多くステューアードに據り、總かた處々その表現を易くしたもの、過ぎなことを稱せられる(John Gray: The Adam Smith. In a catalogue of the library of Adam Smith.)。かれども彼れはスミスと交際のあつたひとりであつたから、吾々は彼れから聽へることが多い。經濟學の父の「體格が中位を稍々超え、容貌は男らしくまた柔和であつた」といふのは彼れが「ち」に傳へられたものである(Ibid. p. xix, 2. ed. p. xxi. 猶ほ附誌参照)。この文章はその子ブレイケンタムにより、一八〇〇年 Literary and characteristical lives of Gregory, Kames, Hume and Adam Smith, Edinburgh, 1800 に收められた(Dictionary of national biography.)。

その後ブレイケンタム、マクラック、ニコルソン、ロヂャーズ等の『國富論』複製者が原著者の評傳を書いてそれらに附屬させたことは前に述べた。またその間

[Draper, William:] Life of Dr. Adam Smith. Extract from Lives of eminent persons. London, 1833. (Library of useful knowledge.)

Kay, John: A series of original portraits and caricature etchings...with biographical sketches and illustrative anecdotes...

Edinburgh, 1837-38.

[Bagehot, Walter:] Adam Smith as a person. Fortnightly review. 1876. vol. 20.

Farrer, James Anson; Adam Smith (1723-1925)...London, 1881. (English philosophers.)

Delatour, Albert: Adam Smith: sa vie, Ses travaux, ses doctrines... Paris, 1886.

Haldane, Richard Burdon Haldane: Life of Adam Smith... London, 1887.

その他の小著が公にされたが、筆者はなほその多くを見てゐない。

一八九五年ジョン・ラエ John Rae の『アダム・スミス傳』Life of Adam Smith, London, 1895. が出た。ラエ(1845-1915)は本書のほかにも社會科學方面の勞作もある著述家及びジャーナリストと説明せられてゐるひとである(cf. Palgraves Dictionary of political economy, vol. iii, 1926, p. 738-39)。本書は永い間スミス傳の最も信頼するに足る權威として利用された。彼れは本書のためにグラスゴウ大學の大學記録を調査し、王立エディンブルグ協會にヒューム書簡を、エディンブルグ大學にカライル書簡及びデヴザキッド・レーニング文書を訪ね、その他バックルウ公爵家、ランスダウン侯爵等に藏する未發表書簡を涉獵した(Preface, p. v-vii)。公版當時の一書評は、スミスのグラスゴウ大學教授時代の十二年の記述が最も勝れてゐるとしてゐる。「彼れは、スミスが永く保存せられる證明書に『幸ひにも舉止の俊敏に恵まれる』と書いたジエームズ・ボスウェルから、仰々しい『本學唯一の貴族』ビュカン伯爵に至るまで、その講義に出席した全部の學生を搜し出した。』(慶應義塾圖書館所藏マカラック版『國富論』(一八二六年 E15-27-1)に貼付せられる題名不明の新聞の切抜に據る。cf. J. Rae: Adam Smith, p. 58, 52; W. R. Scott: Adam Smith as student and professor, p. 101-02.)。しかしこの好著もその後の研究により『國富論』の著者の藝術的香りの高い肖像畫だと評される時期が到來した。蓋しスミス文獻はなほ多數に發見の、殊にスミス滯佛時代の消息——彼れは當時日記をつけてゐたと傳へら

れる——を繞る佛蘭西側の研究の期待せられるものがあり、*レヒエ*に在つては、これ等未発見資料により補綴さるべき間隙が巧みに隠されてゐるといふのである。(W. R. Scott: Adam Smith as student, and professor. Preface. p. vii.)

先年物故したグラスゴウ大學のアダム・スミス記念經濟學講座の教授ウリアム・ロバート・スコット William Robert Scott の大著『學生及び教授としてのアダム・スミス』Adam Smith as student and professor. Glasgow, 1937. は、「彼れ〔スミス〕の天稟の秘密は、彼れが有名となる前の彼れの生涯の部分——渡佛前の時期と見た方が恐らく便宜である——に見出される」といふ立場から書かれたものである(Preface. p. viii.)。そのうち「スミスが分配論その他を佛蘭西フ・ジョクラートに學んだとする、通説への抗議を含んでゐることは言ふまでもない。彼れがダルキイヌ家に傳はるタウンゼンド文書中に國富論の一部の初期草稿と認められるものを発見したことは、スミス研究への一の大きな收穫であつた。本草稿による彼れの結論には勿論異論は挿み得る(大道安次郎『スミス經濟學の生成と發展』二二二—二三頁)。またこれを認めるとしても、國民所得分配の態様を説明するものとしては、ケネーの『經濟表』に可成り逕庭あることを承認しない譯にいかない。經濟學へ分配論導入の功績は、これをこの外科醫經濟學者に譲つていゝのであらう。

五

國じくスミスの風貌を傳へるものに、その肖像がある。J. P. ミュアヘッドの『ジェームズ・ワット傳』は、この發明家が一八〇五年新たに發明した彫刻機械で小さなスミスの象牙彫胸像を作つて友人に贈つたことを傳へ(James Bonar: A catalogue of the library of Adam Smith 2, ed 1932. p. xxxix; J. Rae: Life of Adam Smith. p. 74.)。またジョン・レエはスミスのグラスゴウ大學教授時代、彼れの半身石膏像が書店の飾窓に現はれたことを言つてゐる(Ibid. p. 59.)。しかしそれ等がどんなものであつたか、全く

吾々に知られるところがない。

彼れの肖像は、一七八七年ジェームズ・タッシー James Tassie がその晩年の姿を寫した胸像が最もよくその面影を傳へてゐると一般に信ぜられてゐる。タッシーは、實物から願に原型をとり、ヘンリー・キン Henry Quin との共同發明にかゝる硬質「白色エナメル合成物」に鑄た肖像牌の作者として記憶せられるひとである。彼れはアダム・スミス初め多數蘇蘭有名人の肖像を製作してゐる。彼れは一七六六年から倫敦に移り住んだ(The dictionary of national biography. vol. xlix. p. 374.)。像は正左半面胸像である。廣い額、高い鼻、少し鉤なりだが、薄い上唇、少し受け口な下唇。緊つたい恰好の頤。強く曲つた眉。重く垂れ下つた上脛。腫は鋭い。そして弛んで皺が刻み込まれてゐる下頤の下部の筋肉。これらその特徴を示してゐる。頭には鬘を被り、後ろでリボンが結ばれ、返しのない廣い襟が頤の下まで釦でかけ合はされ、その下から纒かネクタイが覗いてゐる。そして截頭に「六十四歳のアダム・スミス。一七八七年、タッシー、エフ Adam Smith in his 64 th year. 1787.」と刻まれてゐる。大きさは、頭から胸まで三インチである。この胸像は、作者が本人を實際にモデルとしたものかどうか確かでない。ダッカアド・ステューアートは「彼れは自分の肖像を挿かせることがない」と言つてゐる(Account of the life and writings of Adam Smith, II. D. Read by Mr Stewart. 1795. In "Essays on philosophical Subjects by the late Adam Smith" London.)。そしてそれは彼れは肖像をとることが大嫌ひだつたといふスミス家の言傳へと一致する。けれどもタッシーの研究家であるジョン・ミラー John Miller Gray は、タッシーがモデルに窮屈な思ひをさせず、また記憶から製作して却つて對象物の特徴把握に成功してゐる場合が多い事實、一七八七年はスミスがエディンブロに住みついてグラスゴウ大學總長に選ばれた起念すべき年であつたこと、またその頃タッシーが住んだ「倫敦を時々訪れてゐる」事實から、彼れがモデルとしてタッシーの前に立つたといふことは不可能でないと見てゐる

② L. Bonar: A catalogue of the library of Adam Smith. 1894. 而して兎に角ステewartの「アダム・スミスの肖像牌は」(p. xx-xxi; 2. ed. 1932. p. xxi-xxii) of. Ibid. p. xix. 彼の半面とその容貌の一般的印象の觀念を完全に傳へることを保證してゐる (D. Stewart: Account of the life and writings of Adam Smith. In "Essays," p. xciv.)

この肖像は、その後ウヰッチウヰト塑像に複製せられただけでなく、屢々模寫されて、石版、銅版その他の印刷に附された。「スコット・マガズマン」Scotts magazine 一七九六年一月號に匿名作家により、一八〇一年の同誌五月號に Bengo より印刷された。そしてその際原型を著しく誤り傳へられることも多かつた。例へば T. 及び J. オースマン T. and J. Allman から出版された『國富論』一八二五年版 An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. By Adam Smith LLD. F. R. S. With a life of the author ac xc. in three volumes. London. Printed for T. and J. Allman. 1825 註に載せられた W. ナイス W. Wise によるもの如きは國富論の巻頭を飾るが故に彼れと解せられる程度のものである。その完全なものが W. ナイス・ホースマン John Horsburgh の手により一八二八年マカランク版國富論巻頭に R. O. ヴァン R. O. Bell による一八七二年同版に、また W. ナイス・タナーの James and William Tassie, a biographical and critical sketch with a catalogue of their portrait medallions of modern personages. Edinburgh, 1894. 註として最も完全なものが、ボナア『アダム・スミス文庫目録』第二版(一九三二年)に載せられていることは何人も知る通りである。現物は現在バンナム夫人の手に在る (W. R. Scott: Adam Smith as a student and professor, p. 272.)

註、この袖珍版は The vanderblue memorial collection of Smithiana, 1939. に載せて居る。

この肖像牌には W. ナー Warner が 1/16 吋に縮めた小型のものである (J. Bonar: Catalogue). また W. ナイス自身

にも鬘を除け、頭胸をむき出した、ギリシヤ風に仕上げたものがある。大きさは前述のそれと同じく、截頭の銘も略々同様である (Ibid. p. xxii; W. R. Scott: Adam Smith as student and professor. p. 304.)

ジョン・ケイ John Kay 註がスミスを腐版畫としたものに二種ある。ともに全身像である。鍔の廣い帽子を被り、半ズボンを穿ち、「スメリー」が「街でもどこでも、彼れはいつも笞を鐵砲のやうに肩にした」といふと同じに右手に笞を携へ、左りに何のためかわからないが、花束を手にする圖柄のものには、「K. Fee. 1787.」の署名がある。故にこの方はタッシイ牌と同じ年に製作された譯である。けれどもこれは、頭の位置、鬘、襟その他がタッシイ牌のそれに甚しく似るところから、これを基礎に、エディンブロの街で見かけたスミスの姿で補足したのであらうと推測される。いま一は縁の反つた帽子を被り、暗色の服を着け、右手に笞を、左手で机上の國富論の一卷を指すものである。一七九〇年の日附があり、その死を紀念して賣らんがために製作されたものであらうと想像されている。

兩者ともケイの A series of original portraits and caricature etchings... with biographical sketches and illustrative anecdotes... Edinburgh, 1837-38. に收められたものである (J. Bonar. Catalogue).

註 ジョン・ケイ(一七四二—一八二六年)は一七四二年四月ダレキースに近く生れた微細畫家である。彼は妙に獨創性のある、よく似た肖像畫を描き注文者に氣を容られた。生涯に九百枚近い蝕刻版畫を作り、バーミンズを除き當時の蘇蘭の名士を殆んど悉く畫筆に載せたと稱せられる。(The dictionary of national biography, vol. x. p. 1136-37.)

描いたものには、永年カコウデイのシヤア Muir 家に傳はつたから「シヤア・ポートルト」と稱せられる作者不明の油繪がある。現在はエデキンプロの J. H. ローマン J. H. Romanes 氏の手にある。これは、これまで述べたものと異り、略々正面を向いてゐる。J. M. グレー John m. Gray. 註一は畫風その他から、第十九世紀に入つ

でタッシー牌を参考として描かれたものであらうと憶測してゐるが (Ibid. p. xxiii—xxiv; The vanderblue memorial, W. R. Scott は、この肖像の額がタッシー牌のそれよりも些か長く、高い。またその下唇は明かに大いに出て居る。この下唇の出ることはスミス家の人々の特徴で、この肖像はタッシー牌よりも本人によく似るものとして高く評價してゐる。製作の時期に就いては本人を直接寫生したものでないにしても、また歿後描かれたにしても、なほ記憶かな間に筆を採られたものに相違ない。従つてその時期は一七九〇年を離ること遠くあるまいと推察してゐる。(W. R. Scott: Adam) 註一

註一 本稿は主として J. Bonar: Catalogue of the library of Adam Smith. 1894. p. xviii—xxvii 及び 2. ed 1932. p. xx—xxviii に収録されたジョン・ソーンズの『アダム・スミスの肖像』に據つたものである。

註二 Trustee of David Laing, LL. D. 及びハンブルの国立考古博物館に寄贈された "Ty collop's Pinx" の署名がある肖像は、『國富論 第一巻』Wealth of Nations, Vol. I の書名ある書籍を側に置くが故に、スミスのそれと見做されて來たが、その眞偽は疑はれてゐる。—J. Bonar: Catalogue. p. xxiv—xxv.

六

アダム・スミスは死後豊かな財産を遺さなかつた (J. Rae, Life of Adam Smith. p. 437)。がしかし學者に相應しいその中位の遺産のなかに、数千冊に上ぼる愛蔵書があつた。すなはち今日吾々が「アダム・スミス文庫」[The library of Adam Smith. の名を以つて呼ぶものである。母と友と書籍、これが彼れの三つの大きな悦びであつた (J. Rae) 〇 最初の傳記者ダグダ・ステューアートは「彼れが選擇に多く判斷を費して逐次集めた、小さいが優れた文庫と、形式的な招待状抜きで友人を款待していつも幸天を感じてゐた、手厚いが簡素な饗應とが、彼れ自身の

ものと考へられる唯一の失費であつた」と言つてゐる (Dugald Stewart: An account of the life and writings of the Adam Smith. 1795)。アダム・スミスはこれに對して一七八一年に藏書目録を作つた。今日東京帝國大學經濟學研究所に藏せらるる A catalogue of books belong to Adam Smith Esq. 1781. がこれである。冊数はマカラクが本文庫の分散前——後に述べるやうに本文庫は後に一部分散した——五千冊を數へたと言つてゐるけれども、ボナアは恐らく三千冊位であつたのだらうと推測してゐる。それは一應は、本文庫の半ばを譲られたといふハンナマン本の現存するものが略々千四百冊を數へるからである (James Bonar: A catalogue of the library of Adam Smith) 〇 各冊に「アダム・スミス」とだけ印刷した簡素な藏書票が貼つてある。その内容に就いてはその大部分を見たといふ J. S. ニコルソンは「より以上變化ある文庫を見るのは難しいだらう。旅行記と詩の本の多いのに一番驚いた。そのあるものには幾多の版本が藏せられ、時に豪華版が雜つてゐた。私は『國富論』のある箇所の典據を明かにする餘白への書入れや、参照を見付けたいと思つた」といふのはスミスはまるで参照を與へてゐないからである註) が、『穀物法に關する小冊子』の聰明な數々引用されてゐる著者さへしるしをつけないで免れてゐた。と同時にハンフレットは入念に合本せられ、スミス自身の筆蹟で初めにインデックスが附いてあつた」と書いてゐる (Wealth of Nations. Nicholson, 1884. Introd. Essay. p. 8. cf. J. Rae: Adam Smith)。また一八九四年スミスの舊藏書を尋ねて、約千部二千冊の書名を得たボナアは、文學、藝術書が全體の五分一、ギリシヤ、ラテンの古典及びその註釋書が五分一、法學、政治學、地理書が五分一、經濟學及び歴史が五分一、科學及び哲學書が五分一と殆んど均分され、また國語別にすれば三分一弱がフランス書、三分一弱がラテン、ギリシヤ、イタリー書であつて、殘る三分一強が英書であることを言つてゐる (J. Bonar. A catalogue of the library)。前記一七八一年の藏書目録はその所藏者に於いて複製の

計畫があるといふから冊數、内容共に明かにせられる日も近いことであらう。

註 此れは再版以後の各版には事實でない。(J. Bonar: catalogue. 1932. p. 207. note 1.)

彼は「文學、哲學の各部門の最良書の最善版、最善本の欠を蒐めた。(J. R. Maculloch: Sketch of the life and Treatises and essays on subjects connected with economical policy. Edin., 1853. p. 459, and J. R. Maculloch. ed. In ed.: An Inquiry into the nature and courses of the wealth of nations. new ed. 1839, p. x. 彼と同じくエディンプロ哲學) (後に王立) 協會の會員となつた印刷業者ウィリアム・スメリー William Smellie は、「私が偶々初めて彼の文庫に入つたとき、些か好奇の眼で、いな恐らく驚いて書物を眺めてゐた——といふのはその多くが優美であり、そのまたあるものは極めて素破らしい装釘であつたから——のを見て、『貴君は、私が本だけにお洒落であることに氣附かれたに違ひない』と言つた」と書き残してゐる (Ibid. p. x). しかしマカラックはこのスメリーの言葉に些か不賛成で、それ等は小奇麗に、また時に優美にさへ装釘されてはゐたが、素破らしいといふ言葉で表はせる装釘のものは、殆んどまたは一冊もなかつた、と言つてゐる (J. Rae: Life of Adam. p. 329. 今日吾々が現に見る状態から——その大きな一部が今日東京帝國大學經濟學部研究室に保管されてゐる——また藏書票に見える彼の趣味から、『彼れは装釘の善美よりも、丈夫が目的であつたらしく、稀本とか特製版の探求者でなかつた』といふボナアの言葉が當つてゐるのでないかと思はれる (J. Bonar: Catalogue of the library. of Adam Smith. p. ix).

この文庫は遺言によつて彼が自分の後嗣に定めた従弟のデヴィッド・ダグラス David Douglas すなはち後のレストン卿に譲られた (J. Bonar: A catalogue of Adam Smith. p. xvi. ダグラスは一七九〇年十一月「思索協會」 Speculative Society で「生活必需品への課税の影響」 the effects of taxation on the necessities of life について報告してゐる。スミスがその愛藏書をこの従弟に譲つたのは、一つにはこの學問的熱意を買つたのであらうと、ボナアは推測

してゐる (J. Bonar: Catalogue. p. vii. この文庫の散佚を描しむ情ろは遺族も友人も同じであつた。スミスの死後、ダグラスが後事をジョン・ミリアに相談した手紙の返事に、後者に儉ましい生活を奨励したのち、「私は文庫を損ねることなしに」といふ意味です。あの文庫は貴君も確かにそのまゝ保存されることを望まれるでせう」と書き送つてゐる (W. R. Scott: Adam. p. 312. Smith. 1937, p. 312).

文庫はレストン卿の死後その二人の女に分たれ、經濟書はエディンプロのハンナマン夫人 Mrs. Bannerman の他のものはプレストンパンスのカンニング夫人 Mrs. Cunningham に收められた (J. Rae: Life of Adam. p. x. ハンナマン夫人の分はその歿後子息の手により、一八八四年と九四年の二度に亘り、エディンプロのニュー・カレッジに寄贈され、今日そこに現存する。しかしカンニング夫人に渡つた部分は、それと違つた運命に逢着した。夫人は夫君の歿後その一部をエディンプロで賣り拂つた。こゝでスミスの文庫は一部散佚を見ることになつた。そしてエディンプロで賣却されなかつた部分は夫人の死後子の博物學者カンニング教授 Prof. R. O. Cunningham に傳へられ、教授は生前その奉職したベルファストのキャンズ・カレッジにその一部約一〇〇冊を寄附した。然るに一八八八年教授が死ぬとその藏書が競賣に附せられ、「スミスの藏書票の貼られた」その約三百餘冊がデューロー會社 Dalan & Co. から賣りに出された (cf. J. Bonar: Catalogue. p. 25. これを新渡戸稻造博士が買取られて東京帝國大學に送致された。これが今日同大學經濟部研究室に保存せられる「アダム・スミス文庫」である。そしてそのうちに前にも一寸觸れた一七八一年の年紀ある「アダム・スミス所藏本目録」 A catalogue of books belong to Adam Smith Esq. 1781. フォリオ一〇三枚の一冊がある。すなはちバンニャ・ハウスの恐らく書齋を飾つたであらうところの、スミス晩年の藏書の姿を現はすものである。『經友』第二十八號、大河南一男。ホダスン教授はエディンプロで賣られたス

ミス文庫の二十數冊を買取つて愛蔵してゐたが、その歿死未亡人は女婿で同教授の後任者であるニコルスン教授の意見に従つてこれを大學圖書館に寄附した。そして教授自身も同じくエディンブロの賣立で買った數冊を、アダム・スミスの郷里カロウデいの博物館に寄附した。またアダム・スミス文庫はこの外に所蔵者からスミス崇拜者の手に贈られるといふこともあつて多少分散したのもらしい。マカラックはその『一經濟學者の家藏文庫目録』(一八六二年) Catalogue of the Library of Political economist, with critical and biographical notice. London, 1862.) 中の History of debt and taxes from William the Conqueror to the year 1761. の項に「本書は前を以てアダム・スミスの所有だつたから、彼の藏書票がある。私はそれをアダム・スミスの後嗣だつたレストン卿の女の一人と結婚したカンニングガム氏から贈られた」と書いてゐる。(P. 262; cf. J. Bonar: Calalogue.) またダグラスに據れば、スコットカン卿 Earl of Buchan がスミスの生前その文庫で見たと云ふ稀書ロバート・オブ・ロー Sir William Lockhart of Lee の回想記 Memoirs 註が歿後文庫に見出されず、また前記一七八一年(恐らく)の藏書目録中にも登録されてゐないといふことであるから、スミス自身の手で處置せられたものも、幾らかはあつたのである。(J. Rae: Adam Smith.)

註 本書に就いては James Bonar: A catalogue of the library of Adam Smith. 2. ed 1932 p. 104. 參照

かやうにして多少の分散と一部の散佚を見たスミス文庫收藏書の所在を尋ねてジェームズ・ボナアは、一八九四年に『アダム・スミス文庫目録』 A catalogue of the library of Adam Smith. London, 1894 を、また更に一九三一年にその増訂新版を出して、約一千一百部二千二百冊の書名を収録した。スミスの藏書票がある同文庫の舊藏書は、その後も數々の機會に發見せられて報告されてゐる。註 ヲロード・ジョンズによつて報告せらるるジョン・ホプキンス大學の「經濟學古典コレクション」 Hutzel collection of economic classics の三十餘部なども

看過せらるるものがある。(Claude Jones: Adam Smiths library — Some additions.) 後述するハンタムの「ヴァンタ
 ヲブリュー・コンメンツ」中に C. Julii Caecaris quae extant omnia eum animadversionibus integris Dion.
 1718 外八部が收藏されてゐる、ことが報告されて居る。(The Vanderblue memorial collection). 本邦でも勝本鼎一氏は先

年英國の留學の際ローナボニス・サルベリアヌスの『哲學者誌辯證者傳』希臘譯』(一六二六年ゼネン版 Eurytelou
 Tou Λαδοδρον biol. φολο6D'φωυ Kartholis tw. Eunapius Sardiannus Devitis philosophorum et sophistarum,
 Hadriano Iunio Hornano interprete. Graecum mss. Palatinis comparata, aucta, & emendata Hieronymi
 Commelini opera. Nure recens accedunt euicodem Auctoris Legationes. & Bibliotheca Andreoe Schotti Antwerpiani.
 Apud Samvelem Crispinum. Anno M. DC. xvi. Genevae. を譯して將來かられた。また同志社大學圖書館に占ぐか
 の『言語の起原と進歩に就いて』(一七三三—一七三七年 Of the origin and progress of language. vol. I-IV.
 Edinburgh: Printed for I. Balfour, Edinburgh; and in the Strand, London. MDCCXXXIII-LXXVII. を収録されて
 ゐた。そしてこれ等はともによボナアの『スミス文庫目録』(一八九四年版及び一九三二年)版に記載がなく、その訂
 正を求めてゐるのである。

註 Economic Journal. vol. 44, 1934. Current topics (by James Bonar.) p. 349.

Ibid., vol. 46, 1936. Current topics (by James Bonar.) p. 1781.

以上はアダム・スミス躬らが蒐めた文庫の物語りである。私はこれと並べてアダム・スミス自身の著書の蒐集に
 少しくこゝで觸れて置きたい。世にスミスの著書の蒐集を志したひと鮮くはなかつたであらう。しかしその最も
 完全なるものは、恐らく H. B. ヴァンダブリューの蒐集であらう。H. B. ヴァンダブリュー Homer Bcws

Vanderbilt は(1)の Harvard Graduate School of Business Administration の商業経済学の教授であり、現(一九三九年に)同校のヘッカー図書館名譽初期経済文献主事たるひとである。彼はこの蒐集に志したのは、一九二〇年代の中頃の春日の午後ワシントン^(H. B. Vanderbilt: Adam Smith)の古書肆で『國富論』の初版及び再版を手にしたのが始めだと言つて(『H. B. Vanderbilt: Adam Smith』, p. 3)。その十年、約百五十種の『國富論』と約三十種のスミスの著書を集つて、一九三六年目録 Adam Smith and "Wealth of nations." An adventure in book collecting and a bibliography. Boston, 1936. 上梓した。蒐集はその後も繼續せられ Bulletin of the Harvard Business School Alumni Association. 一九三七年九月號にその増加が報告せられてゐる。本蒐集はその後 Harvard Business School に寄贈せられ、その目録が C. J. バロウ^(H. B. Vanderbilt: Adam Smith)の論文を附して、一九三九年『ヴァンダーブリー紀念スミス文献蒐集』The Vanderbilt memorial collection of Smithiana として公にされた。本書は恐らくアダム・スミスの著述の原版、異版、翻譯版の最も完全な書目であらう。本蒐集は、目下ヘッカー図書館のクレネス室 Kress room に保管せられてゐる(The Vanderbilt memorial collection of Smithiana. Introduction)。慶應義塾でも夙くからスミス文献の蒐集に努め(『國富論』英語版の主なるものを揃へてゐる。本書誌『國富論』各版の説明は、主としてこれに據つたのである。

七

アダム・スミスの業績は、一八七六年恐らく始めて公に、倫敦「経済俱樂部」Political economy club. によつて紀念せられた。註倫敦経済俱樂部は、一八二一年四月トーマス・トウク^(H. B. Vanderbilt: Adam Smith)の首唱の下に、自由貿易主義を標榜して、J. ミル、トレンズ等——リカード、マルサスも含めて——を同人に創められた研究團體である。少し後れて、シイゴ、マカラ、ク等も加はつた(Political economy club, founded in London, 1821. Names of members 1821—1881 and list of questions discussed, 1872—1880. Vol. III.

London, 1881. Preface)。この團體は毎年十二月及び一—七月の毎第一金曜日に例会を開き、その日は簡素な晚餐の p. 3, 14—17. Ibid. Preface, p. 3)。そういつた例会の一つが、この年の五月三十一日グラッドストーンを議長として、特に「國富論出版百年」を紀念するために捧げられたのである。議題には、R. ローウ Robert Lowe の提出する「恰も百年前出版の、國富論より生れた諸結果の、比較的重要なものは何であるか、また本書に説くところであつて、なほ適用されない主要方面に如何なるものがあるか」が取り上げられた(Ibid. p. 58)。この會には、遙か海を越えて佛蘭西から、當時大蔵大臣の現職にあつたレオン・セイ Leon Say が列席し、スミス経済學がその祖父 J. B. セイによつて佛國に紹介され、その國に及ぼした影響を次ぎの言葉で述べた。十八世紀の末、ファジオクラウトの人々は、多數の膠想に雜じて幾多の豊かな思想を述べ、スミスが後に眞理の種子を播いた土地を用意してゐた。その後革命が佛人の眼を經濟問題よりも、もつと切實なそれに逸らせたが、しかしその間にも、隠れた情熱を貯へる人々——そのなかに私の祖父 J. B. セイも數へられる——があつて、スミスの教説を奉ずる小集團を形成した。しかし時恰も第一帝國建國の前夜に當り、新しい後退は免れなかつた。この帝國は、その思想を慌れて經濟學者を愛さなかつた。第一帝政時代、佛蘭西に經濟學は存在しなかつたと考へていい。しかしかういつた忘却の時代がやがて逝いて、佳き日の經濟學に廻り來るべきは當然であつた。「一八一四年十一月 J. B. セイは英國に旅行した。彼れはグラスゴウを訪れ、アダム・スミスが教へた椅子に腰を下して、兩手で頭を抱え、この師の心の火花を佛蘭西に移そう——これが彼れのいつた言葉である——と心に決した。この火花を彼は果してこの國に移した。そして燃え上がらせた。彼れはその講座の周圍に、經濟學の眞原理の説明を初めて聴く多數の人々を聚め、一派を成した。爾來經濟學はこの地に根を下し、わが市民権を得た、すなはち佛蘭西

のものとなつたのである。けれども官界からいつも閉め出されてゐた。それは官邊から危険なもの、その結果が恐るべき爆發によつて知られる、装填した銃砲として取扱はれた。J・B・セイもその努力の大成を見なかつた。彼れはその孫が大蔵大臣の職を汚がすと共に、アダム・スミスの學派に屬するを名譽とすと知つたら、ひどく喫驚するだらう (Ibid. p. 96—98)。註一

註一 斷言しないのは、この俱樂部の二八八二年の記録に、一八二一年から三二年に至る十一年間の俱樂部初期の記録が失はれて見えなかつたのだが、最近それを発見した。で委員會にこの期間の議題を編纂するやうに委託してある、と書いてあるが、それを見て居ないからである。(Ibid. Preface, p. 4—3)。

註二 『商學研究』第三卷第一號「アダム・スミス生誕二百年紀念論集」The Adam Smith centennial to commemorate the hundredth anniversary of the publication of the Wealth of Nations, New York, 1876. pp. 48. の記載がある(三八七頁)。本書も未だ私は見る機会を得てゐないから、如何なる組織によつて、紐育で、スミスの國富論の出版二百年が紀念されたのか知らない。

アダム・スミスは「通商の自由がイギリス王國で完全に復舊することを、まともに期待するのは、そこにオーシ¹アナ又はユートピアの設立せられることを期待するのと等しく無理だ」と考へたのであつたが(大内兵衛譯「國富論」版)一八二〇年の「倫敦商人請願書」に始まる自由貿易運動は、一八四六年に穀物法を撤廢し、四九年に航海條例を廢止させ、また五三年及び六〇年にグラッドストーンの手で關稅改革が行はれるに及んでこの國から重商主義的色彩を一掃し、この紀念會が行はれた頃には、既にそこに自由貿易政策を完成してゐたのである。だからこの時に當つて、「アレクザンダー・ベアリング氏の二八二〇年五月八日に於ける自由貿易支持の倫敦商人請願書議會提出

によつて誘發された興味が喚起した世論の一の結果」として一八二一年倫敦に設立された、とその幹部が誌す經濟俱樂部は、彼れの業績を紀念するに最も相應しい團體であつたのである (Ibid. Appendix)。わが國では明治四十四年(一九一一年)三月九日慶應義塾三田讀書會が、その圖書館がその頃「最も珍とす可き國富論原本の諸版並に其他諸版本の殆ど全種類を入手したるを好機として」、國富論出版の「大約百五十年」を紀念して「アダム・スミス紀念會」を催し、三田學會雜誌は「アダム・スミス紀念號」(第五卷第三號)を發刊した。(同號「アダム・スミス紀念號記事」)。

また一九二三年には生地カコウディでその生誕二百年が紀念され、グラスゴウ大學ではその紀念展覽會を開催し、ブリテイッシュ・アカデミーでW・R・スコットが講演を行つた (Economic Journal, 1923, vol. 33)。この際にはわが國でも各大學で紀念會が開催され、その機關雜誌がそれぞれ紀念號を出した。註

一九四〇年(昭和十五年)は、彼れの歿後百五十年に當り、慶應義塾では學術講演會と展覽會を開いてこれを紀念したが、これが彼れを紀念する最後のものとなるのかも知れない。

註 大正十二年六月五日東京では慶應義塾經濟學部、東京商科大學本科學術部が、京都では京都帝國大學經濟學會が、また三日には東京帝國大學經濟學會が、それぞれアダム・スミス生誕二百年紀念會を開催し、講演會と展覽會を準備した。またその際出版された雜誌特別號の主なものに次ぎの通りである。

三田學會雜誌 第十七卷第七號(大正十二年七月)「アダム・スミス生誕二百年紀念號」。

商學研究 第三卷第一號(大正十二年六月)「アダム・スミス生誕二百年紀念論集」。

經濟論叢 第十八卷第一號(大正十三年一月)「アダム・スミス生誕二百年紀念號」。

經濟學論集 第二卷第一號(大正十二年六月)「アダム・スミス生誕二百年紀念論文集」を載せてある。
この他京都帝國大學經濟學會及び關西大學學報局で紀念繪葉書を發行した。

「内外政黨事情」に就て

—改進黨の一機關として—

西田長壽

この新聞は、服部誠一等がやつてゐた江湖新報を小野梓一派の鷗渡會の人々が引受けて改進黨内に於ける所謂東京大學派の機關として發行したものである。従て發行所は、江湖新報時代と同様で京橋區南金六町六番地 四通社であつた。

本紙發行の經過に就ては、薄田軒雲著「天下之記者」(一名山田一郎君言行録)中に山田喜之助談として収録されたものが、要領を得てゐるやうだ。左に引用しやう。

「茲に内外政黨事情廢刊當時、改進黨内の形勢を述べて見ると、始め改進黨創立の當時大隈伯の麾下に集つた同志は、隠然三派に分れて居た。第一は例の鷗渡會派即ち小野梓氏を首領とした山田一郎君其他の大學出身一派で、氏(山田一郎を指す)は専門學校を根據とした形である。次には矢野文雄氏の卒ゆる報知新聞派で、此には慶應義塾出身の藤田茂吉、大養毅、尾崎行雄などの驍將が居る。今一つは舊幕の英學から系統を引いた沼間守一氏の毎日新聞派で、此には島田三郎、肥塚龍などの才物が潜んで居る。處が山田君等の大學派も何か一つ機關新聞がな